

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakaitusushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaitusushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

独占資本は惜しみなく命を奪う

原野人……2

「三池と向坂教室」を無数につくる

山下 俊幸……4

―マルクス主義への確信 理論と実践(下)―

『資本論』百五十年 私の勉強法

中澤 秀行……8

―向坂逸郎先生と『資本論』のことども(下)―

読者からのおたより……………17

編集部だより……………18

旬刊 社会通信

NO. 1226

二〇一六年一〇月一五日号

二〇一六年一〇月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

独占資本は惜しみなく命を奪う

病の根源

独占資本の支配は、毎日のように悲劇を生む。

相模原の施設障害者殺傷事件は、自分が障害者手帳を持つ身（十八年前の脳出血で左足に麻痺とシビレの後遺症を持つ）だけに、とりわけ重く感じる。本誌1223号で滝野嘉津子さんがまとめられた里内龍史さんの訴えは、全面的な共感を覚える。

向坂先生なら、この社会の深刻な病の根源についてどう分析されるだろうか。

ヘイトクライムや優生思想は資本主義が生み出さずにはおかない。資本主義は国のためという名目で、本当は一握りの大資本のために戦争をして大量に殺害する。平時にも、資本の競争は人間を差別して、必ず大勢の失業者や半失業者（非正規労働者）を作る。そして多くの人々が健康を奪われ、命を奪われる。これも大量殺人となる。

人間の犠牲の上に儲けているのは兵器産業の資本家だけではない。資本主義的生産の絶対的法則は利潤となる剰余価値の生産であり貨殖である。資本家にとっては剰余価値の取得、搾取による価値増殖が自己目的となり、そのためには人間性は無となり、人間を犠牲にする。優れた資本家ほど、平然と首を切り、労働条件を切り下げて、多くの人々を犠牲にする。施設障害者の殺傷犯人は「病気ではないが正常でもない人間」とされているが、この社会の成功者とされる誉高い大資本家は実は誰もがそうである。産業予備軍にもならない老人や障害者は、資本にとって無用の長物である。

独占資本の政治的代理人である麻生太郎財務大臣は「いつまで生きている積りだよ」と老人などが長生きすることを非難する。

独占資本の御用評論家であり作家である曾野綾子氏は「高齢者は『適当な時に死ぬ義務』を忘れてはいませんか？」として『いくらでも生きたい』は傲慢」と述べる。

かくして行財政はますます独占資本本位となり、介護も医療も年金も生活保護も税制も改悪して庶民の命を奪う。

老人等が人間らしく生きる原資は

総務省によると、国勢調査人口が二〇一五年に初めて減少に転じた。二〇一〇年の前回調査から九四万七千余人減って、外国人を含む人口は、一五年一〇月一日時点で一億二千七百一十万人強となった。減少傾向は止まらない。

実質賃金は一九九六年から二〇年来低下していて、しかも不安定雇用が増えているのだから、結婚もできない青年が増え、人口が減るのは当然である。資本はこの長期的傾向によって労働力人口が減少して老人が増え、産業予備軍が減ることを懸念する。

独占資本とその国家は、生産性の向上、資本主義的合理化の促進に力を入れる。不変資本に対する可変資本を相対的にも絶対的にも減らして、自然人口が減少する中ですら、相対的過剰人口を作る。AI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）などによる際限のない省力化、オートメーションを推進する。資本の集中、吸収・合

併による大量解雇もとどまる所を知らない。

労働者一人当たりの富の生産は巨大となっている。この富の所有権は生産手段を所有する資本家階級にある。わずかな富が労働力の価格として労働者に支払われた後に、巨億の富は人口の〇・一％にも満たない独占的大資本家階級の手利潤（剰余価値）として収まり蓄積される。日本の独占資本の総資本額は八千四百兆円を超えているとされる。タックスヘイブン（租税回避地）などへ隠された資本もあるから、実際にはこれよりはるかに巨額となる。内部留保（企業の利潤から配当などを差し引いて残る「利益剰余金」）はどんどん増えて四百兆円に迫る。

これらはすべて剰余価値として労働者階級から搾取された富である。今日の老人がかつて生み出した富に、今日の青壮年が加えている富である。老人や障害者が人間らしく長生きする原資はここに十分すぎるほどある。しかも利潤のためにしか生産しない資本主義は、いまや慢性的恐慌ともいうべき状況に陥り、多くの産業では低い稼働率を続け、さほど古くもない多くの設備を廃棄処分している。

雇用を増やし稼働率を上げることができさえすれば、富の生産をさらに飛躍的に増やすことができる。AI等々を人間のために活用すれば、老人や障害者も労働の本来の喜びを得ながら富の生産に参加することを可能にする。そのためには、収奪者を収奪して、物的生産諸条件を労働者自身の協同的所有に移行することが不可欠であるが。

ここまで非人間化した独占資本

収奪者・独占資本とその国家がどんなに非人間化しているかは日々のメディアも報じるところである。中でも原発をめぐるのはだれの目にも分かりやすくなっている。

福島事故を受けても、この地震列島に原発建設を推進してきた責任者達が何の処罰を受けないまま、各地で再稼働が進められ、輸出もはかられている。メルトダウンした核燃料が各格納容器の底でどうなっているかも掌握できないまま、いたずらに「廃炉計画」が進められている。炉を四方から遮水壁で囲うべきであり、凍土式では流速や流量が大きいところでは凍結しないからだめだと初めから指摘してきたのに、すでに何百億円もの税金を浪費してしまった。流入する地下水は減らせず、汚染水のタンクは増えて、やがて放流する方針である。「空間の年間積算線量二〇ミリシーベルト以下」というICRPの緊急時の基準によって、「放射線管理区域」の四倍にもあたる地域にまで避難指示の解除を進めている。賠償金も打ち切ろうとしている。これらのため、「原子力緊急事態宣言」を解除するわけにはいかないのだ。すでに福島県内の小児甲状腺がんの発生率は、全国データの二〇〜五〇倍にもなっている。

地震学者で前規制委員長代理の島崎邦彦氏は、基準地震動が過小評価だと指摘しているのに、規制委も電力資本も踏みつづす。高レベル放射性廃棄物はもとより、各種の中レベル廃棄物さえ長期的安全に処分できる所などないのに、再稼働を強行だ。

向坂先生のつばやき

向坂先生は「地球は丸いから、どんどん右に行けば、いずれ左に帰ってくるよ」とよくつぶやかれた。「それには滝野君の力が大きいね」と付け加えられたことがあつ

たように思う。愛弟子の滝野夫妻が病と闘いながらここまで『旬刊社会通信』を出し続けてこられたこと、今後もインターネットでホームページが大いに活かされることを、向坂先生も岩井さんも草葉の陰でどんなに喜んでおられることだろう。

(原 野人)

「三池と向坂教室」を無数につくる

―マルクス主義への確信 理論と実践(下)―

活動家に変身

昭和電工労連 昭和電工労連一四単組のうち、埼玉の秩父、福島の東長原は一九六〇年代に分裂させられていた。第一組合が労連に残留。長野・大町、福島・喜多方、千葉工場敷地内にある発電所が左派。研究所と千葉が微妙な力関係であったように思う。千葉工場は最も新鋭工場であったことから、各地方工場の御用派を中心にかき集め、何とか組合を会社のコントロール下に置こうとしていた。工場の増設と共に若い労働者が増え、正義感に燃えた若者を困い込むため、社員教育を徹底、ブラザー制度、体育館で歌手を招いて歌謡ショウ、運動会、バス旅行、そして目標管理、小集団管理、ありとあらゆる当時はやりの労務管理を酷使していた。

当時、春闘や一時金の回答が本社・本部間で決まると、会社はその日のうちに、昼夜問わず説明に当たった。ある時、説明を終えた課長が「何かわからないことがあったら聞いて下さい」といったので、私が手をあげて、たわいのない質問をした。課長は丁寧な答えてくれて嬉しかった。今は、その時どんな質問をしたのか内容は全く覚えていない。その程度の内容であったと思う。

赤の二重〇 説明会が終わって現場詰所に戻ると、現場管理者から電話が入り「すぐに管理室に来るように」言われた。行ってみると、「ああいう場で課長に質問するのは何事だ、課長は儀礼的に質問はないか、と言ったままだ。君のような人間のことを赤の二重〇というんだ」と顔色を変えて怒っている。何のことも意味もわからず、クビを傾げながら現場詰所に戻って先輩に報告すると、先輩たちは口々に「もう会社を辞めるしかない」「会社にいても睨まれるだけで出世もできない」という。私は赤の二重〇という意味すらわからなかった。戦後のレットページを見てきた、ある先輩が「共産党のことだよ」という。

共産党のこともよく知らなかったが、ある先輩の勧めで、とりあえず、共産党に相談しにいった。私を見て相手にしてくれなかった。そのことを報告したら「では社会党に相談してはどうか」という。社会党は地元では評判が良くなかったので気が進まなかったが、とりあえず行ってみた。たまたま、迎えてくれたのが当時、社会党の千葉県議会議員で社会党県本部書記長の上野建一氏(当時は三十歳代)であった。

学習、組織づくり そこで、社会党に入党すること、学習をすることを勧められた。

「勉強が嫌いだから、今こうして肉体労働をしている。勉強が好きなら医者か学者になつて」とへ理屈で反論したのを覚えている。しかも『共産党宣言』を一緒に勉

強やろうという。俺は共産党から相手にされなかった男だ、何で今さら、共産党を勉強するのだ、と、この人は変な人だなあ、と思いつながら帰ってきた。上野さんは私が非番、明け番で家にいると風呂敷包みをもって訪ねてくる。そしていろいろ話を聞いてくれたり、話もきかせてくれた。

そのうち、社会党県本部のオルグのW氏が連日のように押し掛けてくるようになり「社会主義青年同盟を作ってくれ」という。三人で班ができるので三人集めてくれという。私は、当時青年部長のY君、兄が鹿児島全通の活動家だというM君に話をつけ私を含めて三人。そうしたら、W氏は君は党に入るのだから、もう一人必要だという。困り果てて、考えていたら、遊び仲間の悪友のFのことを思い出し、「実は社青同を作ろうと思うのだが一人足りないのです、お前さんが入ってくるといいんだが」、彼は「やめとけ、やめとけ、どうせやるなら中核派でやろう」という。彼は成田の近くの町の出身で三里塚の空港建設反対運動にも足を運んでいた。いわば、中核派のシンパで、そのころ千葉工場には、中核派の活動家は大勢いたし、他の諸党派もいたが、彼らは労働運動にはほとんど関わっていなかった。

私は「俺とお前の中じゃないか、俺が社青同づくりで困っているのに」「とにかく名前だけは登録させてもらうぞ」これで私以外に三名がそろった。Y君は青年部の活動家を中心に、M君は同期入社(二八〇名)を中心に、組織を拡大し始めた。私の家は若い人たちのたまり場と化した。

「組合を強くする会」結成

名称は『組合を強くする会』、社宅一階の私の家は会社の監視が厳しくなり、やむなく会社にばれないように隣の千葉で月二度の集まりをもつようになった。洪っていたFも、職場の仲間を連れてくるようになった。でも、私とFの遊び癖はなかなか治らない。ある時は居酒屋の奥の間で徹夜でマージャン、ある時は千葉の繁華街にくり出す。一時金を貰うと、家に帰った時には中味はほとんど無くなっていた。

学習会 私は、すでに赤の二重〇と烙印を押されているので怖い者はない。「首にするならどうぞ」と開き直っていたが、入社したての若い仲間のことは心配でならなかった。私の家を監視していたHは部下の奥さんに手を出し諭旨免職。もう一人のGは中卒ながら出世して本社に栄転したが、女に貢ぎ一億円近くを横領し懲戒解雇。皮肉なものだ。

地区労の青年部を担っていた鳩川氏は地区労の春闘討論集会に現役の総評事務局長・岩井章氏を招いた(岩井氏は昭和電工中央研究所の仲間T君の仲人でコネがあった)。Y青年部長は(多分滝野さん紹介)で国労本部の池本柳次青年部長を招き、組合会議室で堂々と青年部の学習会を開催。会社と組合は慌てだした。

御用組合でも そんなとき一九七一年、時間外レクレーションで脛骨を骨折し重体(全身麻痺・寝たきりの状態)となったO氏(会社協力派)の労災認定問題が起こった。当時鳩川氏は執行部に入っていた。私をはじめ「組合を強くする会」のメンバーも職場委員長や常任委員に当選し、機関会議に進出し始めていた。私は毎回のように会社・

組合を追及。鳩川氏は執行部として答弁。彼の献身的努力もあって〇氏は労災に認定された。

当時の総評・安全センターでも高く評価され、鳩川論文が掲載されている。その後、〇氏の労災の「打ち切り補償」は「長期療養補償給付」（三年間で完治しなければ、補償金を払えば首にできる）問題が起こる。私たちの激しい闘いで、三年後の首切りを阻止し、「第一子が就職するまで、同条件で雇用を継続、自宅（社宅）は一階に移り、スロープを設置、ベットや電動車いすの供与など、ほぼ要求どおり獲得し勝利した。

この闘いを通じて、「御用組合でも闘えば成果はあげられる」と、組合員は考え始めた。活動家は闘いに対する手ごたえを感じとり、自信を持った。活動家は増え、社青同〇〇〇名、社会党〇〇〇名の大所帯になった。「会」結成から数年後、執行委員選挙にも全面対立で立候補、会社監視の下でも接戦だった（私は副委員長に立候補し十三票差で敗北）。

私はその時、仲間たちに「今年には負けただけ来年は勝つ、いよいよ御用組合（組合員数一六五〇名）とおさらばである」と檄を飛ばし、飲み屋を借り切り大宴会を行った。それは一九七四年の八月のことである。慌てた会社は、浮かれている我々をよそ眼に、活動家の首切りを準備し、これが、一九七五年一月からの一五年に及ぶ一四名の解雇撤回闘争になっていく。

三池闘争、昭和電工闘争から学んだこと

「学ぶ」ことは「まねる」こと。私は国鉄闘争の総括運動を提起してから、三池労組の闘いの歴史を改めて勉強した。とりわけ一九五三年の「63スト自己批判書」「主婦会結成」「英雄なき113日の闘い」「職場闘争の強化と生活革命運動」―「さん」づけ運動、借金退治、家庭の民主化、社会党の強化など。一九五六年の「あつちむけ闘争」「交渉権、妥結権、ストライキ権の三権を分会に委譲」、一九六〇年の指名解雇撤回の三池闘争後は、一年七ヶ月をかけて職場の総括運動をえて、五〇五ページに及ぶ労働者階級の団結と抵抗の意義。今後の闘いの決意を示し「闘いは今から、ここから」を具体化した一九六二年四月二十九日にまとめた「長期抵抗統一路線」を学び返してきた。

我々の答えは簡単である。今、改めて「三池闘争と向坂教室」を学び、真似をすることだ。「学ぶ」ということは「まねる」ことからは始まる。

冒頭に、塚元さんと灰原さんの関係を紹介したが、一九七五年から十五年に及ぶ昭和電工争議中、鳩川氏とはあまり細かい話をしなくても意志統一はできた。意見対立したことは一度もなかった。私は一九八二年に退職し、権利問題研究会の専従事務局長として三年、一九八五年に一度地元に戻り、一九八八年から二十三年間国鉄闘争に身を投じてきたが、その陰には鳩川氏の支えがあった。

先輩たち 活動家としての道を作ってくれた上野建一氏、初歩的な組合運動と組合員を大切にすることを教えてくれた、今は亡き、埼玉・秩父の第一組合の井上良一委員長ほか組合員。勉強の仕方を教えてくれた権利問題研究会の福田徹代表。福田先生の

下での勉強は三年で一〇年分の勉強をさせられた。そして、国鉄闘争では岩井章氏である。岩井さんとは随分と一緒に旅をした。いつも泊りは旧国鉄の寮の八畳位の和室で一緒だった。

「君は飲めるのだから、みんなと付き合っ来て来い」と言われる。その言葉に甘えて、私は仲間たちと一杯飲んで夜遅く宿舎に戻るが、岩井さんは先に帰って本を読んでいった。三池闘争はじめ日本労働運動の歴史、常に階級闘争路線に徹し、労働者には優しく接した。討論の進め方、指導者としての態度は謙虚で活動家としての生き方を学んだ。国鉄闘争では時々、事務所を訪ねて報告し助言を頂いてきた。大変恵まれた活動家人生であった。

不戦敗はしない 私は敵の攻撃に無条件で屈服したことはない。当時、千葉では、全国電通、京成の闘いがあり、私たちは物まねで闘った。全国各地に北海道から九州鹿児島までも車に分乗し交流に出かけた。勝つ見込みが無くとも不戦敗だけは嫌だった。何事にも必ず精一杯闘うことが昭和電工の仲間たちの確固たる態度であった。

その負けの闘いから次の闘いの準備と、仲間の組織化を展望した。大所帯になった活動家集団は、職場ごとに班をつくり、各班は毎週のように会議と学習会を定着させていた。私たち千葉の運動は他工場にも広がり、八単組に活動家集団が出来た。

危機感を持った昭和電工資本は、千葉工場の活動家排除を画策し、労使協定に反して活動家に対する配転・出向が強行されるようになった。辞令が出ると担当課長やある時には工場長の部屋まで連日押しかけ集団で抗議行動を展開。工場門前のビラまきには子供たちも動員した。苦しい闘いのなかでも、家族ぐるみのキャンプや運動会などレクリエーションも定期的に取り組んで団結を確認してきた。

工場閉鎖・組合結成 強制配転には裁判で対抗した。とうとう昭和電工資本は一九八六年二月、御用組合と合意・結託し、千葉工場の閉鎖を突如強行した。職場は大混乱。急遽活動家が集まり、東京から私も急遽駆け付けた。議論は続き、日付は変わっていた。このままでは数日後に全員が工場から排除される。工場閉鎖を止めるためには直接交渉を持つしかない。止む無くその場にいた二〇名位で急遽「新組合」を結成し、徹夜で規約や役員、結成大会、会社への組合結成通告書、組合への脱退届、朝9時、本社、工場への組合結成と団体交渉の申し入れ、組合事務所、組合掲示板などなどの便宜供与の申し入れ、ユニオンショップ制を理由に解雇されることを警戒し、万全の準備を進め、念のため千葉の労政事務所にも、同時刻に組合結成を通知した。

その後、組合は地区労に加盟、鳩川氏十九年、北脇氏四年地区労事務局長を担った。二〇〇〇年には全労協にも加盟した。

一九九〇年、十四人の解雇争議は一旦全員の解雇を撤回し、復帰希望者六人が職場に戻り、他の人は自主退職した。年金は全員解雇期間分を回復させた。この組合も今年、最後の一人が定年を迎え、組合を解散し、現在は「ユニオン市原」として地区労を基盤に活動している。

「変わりもん」の確信

戦後の労働組合は、GHQによって合法化されたが、どの企業も課長など管理者が結成に関与し、「眠れる豚」であった。今では正規社員と非正規・派遣労働者に分断され難いことは理解できる。戦後も職員と工員、正社員と臨時工など労働者は分断されていた。そこから三池のような組合が生まれ、その闘争が全国に広がり、国労の学習活動や、現場協議制度などとして具体化した。「反合研」運動も、国労をはじめ全電通、全通、私鉄など全国に広まった。私の知る限り、現在「反合研」として活動、機能しているのは国労の東京上野支部と京成くらいだ。

活動家の組織化と学習会が決定的に減っている。このままの状態では労働運動が推移すると、「反合理化闘争」「権利闘争」「職場闘争」「階級闘争」などは労働用語から消えてしまう。ましてや「反独占・社会主義」「マルクス・エンゲルス・レーニン」も話題にすらなくなってしまう。

今必要なのは、「三池と向坂教室」を無数につくることだ。今、職場で頑張っている活動家の皆さん、「変わりもん」を探し出し、学習会を組織して下さい。定年で現役を離れた先輩の皆さん、理論家・学者の皆さん、どうか戦後の向坂逸郎氏のように、労働者に愛情をもって指導に当たって下さい。指導者は必要である。

そして、私のように出来の悪い「変わりもん」でも、まっとうな生き方に変わるし、必ず三池のように「強い支柱」を作ることにはできる。安倍総理は、八月三日の第三次安倍再改造内閣の発足にあたって、「非正規という言葉はこの国から一掃する」と豪語した。まず、四割が非正規化した公務員職場で正職員化を要求しよう。

民間においても、派遣労働者の正社員化を要求しよう。そして、今、我々に必要なことは社会主義に対する自信を回復させること、「マルクス主義」の正しさを堂々と天下に宣言することである。その運動は、資本主義を打倒し社会主義を展望する組織へと前進することに確信をもつこと、これを自らに言い聞かせながら「変わりもん」のたわごとを終わる。

(山下 俊幸、おわり)

『資本論』百五十年 私の勉強法

— 向坂逸郎先生と『資本論』のことども (下) —

(三) 『資本論』岩波文庫版新訳から

現在でも少し大きな書店の岩波文庫コーナーに並んでいるのが、岩波文庫版新訳の『資本論』です。全三巻が第一分冊から第九分冊になっています。新訳といっても初版の第一分冊は1969年5月刊、第九分冊は1970年3月の刊です。

向坂ゆき夫人と最後にお会いしたのは、2007年5月7日(月)でした。この年の7月に亡くなられたのですが、すっかりされていて、とても百二歳とは思えませんでした。「岩波文庫版の『宣言』も『資本論』も、よく出ているんですよ。誰が買って読んでいるんでしょうね？」とおっしゃられたゆき夫人の言葉が、何とも印象的でした。ご案内のように、この年の4月に『宣言』は改版となり、活字が大きく読みやすくなって現在に至っています。

三つ目の解題 『資本論』新訳の第九分冊には、向坂先生七十二歳の「解題」があります。40Pに渡る大作です。もし、皆さんが『資本論』の勉強会をしようとするなら、この文庫版を使う事になるでしょう。一定の準備をしてから取りかかっても、第一章を読み始めるとすぐに大困難が待ち受けていると思います。と言うより、書店でこの第一分冊を手にして第一章を一頁立ち読みしてみると、購入する気も失せるかも知れません。しかし、マルクス自身第一版の序文で「何事も初めがむずかしい、という諺は、すべての科学にあてはまる。第一章、とくに商品の分析を含んでいる節の理解は、したがって、最大の障害となるであろう。」と述べるくらい第一章です。(ちなみに私は、和氣誠先生との毎月一回3時間の研究会では、第一章を終了するのに十五回を費やしました。)

「兎に角とつつきにくい！」と言う方は、第一分冊(できれば最低、第一巻に当たる第一分冊から第三分冊までは！です。)と共に、第九分冊だけは一緒に購入し、向坂先生の「解題」を先に読んでみたらどうでしょうか。この「解題」を眺めていると、『資本論』に登ってみようと言う気になるように思います。

マルクスとダーウインとの手紙のやり取り、青年マルクスの志と苦難の学問生活、『資本論』の圧巻である「資本主義的蓄積の一般的法則」の解説等々を是非知ってほしいと思います。『資本論』の贈呈に対するダーウインの礼状を是非お読み下さい。研究者なり学問する人の志なり生き方は、いかにあるべきかを知らされます。ブレヒトの一節「君たちは何のために研究するんだ？私は科学の唯一の目的は、人間の生存条件の辛さを軽くすることにあると思うんだ。」(『ガリレオの生涯』岩波文庫192P)を、思い出させます。

向坂先生が三回の翻訳で、記念版の解題である『資本論入門』も加えると、翻訳に際して三つの解題を残されました。共通している事はマルクスの思想的発展、すなわち『資本論』への道筋について述べられている事です。『マルクス伝』も『マルクス経済学の方法』もそうですが、『資本論』が何のために書かれたのかということ、まずもって問題としているのだと思います。

『わが資本論』 他に紹介しておきたいものとして、向坂先生の『わが資本論』(新潮社)があります。

「第一部 資本論への道」は、『流れに抗してある社会主義者の自画像』(講談社現代新書版、社会主義協会版)や『向坂逸郎・ゆき 叛骨の昭和史』(西日本新聞社刊)等とともに、向坂先生の自伝でもあります。加えて「わが生涯の戦い」(『わが生涯の戦い』、『男の生き方四〇選(上)』)所収、共に文藝春秋刊)も短いですが、内容の詰まった自伝です。『男の生き方四〇選(上)・(下)』(城山三郎編)は、文春文庫版もあります。

「第二部 『資本論』を読む人に」の「第一章 何が明らかにされているか」は、『資本論』のもう一つの「解題」です。「第二章 エンゲルスの役割」は、『資本論』の完成に欠かせなかった盟友エンゲルスについて、「第三章 ヴォルフ小伝」は『資本論』第一巻を献呈されたヴォルフの小伝です。折角ですから、エンゲルスの「ウイ

ルヘルム・ヴォルフ』（『マル・エン全集』第19巻大月書店 所収）も合わせて読む
と良いと思います。

この『わが資本論』とともに、前述の『資本論』岩波文庫版旧訳の解題が収められて
いる『「資本論」をめぐるて』（労働大学刊）も紹介しなくてはなりません。ここに
収録されている『資本論』に関する珠玉の随筆は、主食『資本論』の完食を目指す人
の「箸休め」になると思います。

（四）奥山次良教授と『経済学・哲学草稿』

疎外された労働 私が初めて購入せざるを得なかったマルクスの著作は、誤解を恐れ
ずに言えば『資本論』より難解な、『経済学・哲学草稿』（岩波文庫）でした。

大学一年、教養部の学生の時、下宿の先輩に「奥山次良教授の社会思想史は、レポ
ートさえ提出すれば必ず「優」をくれるから」というアドバイスにより、安易に履修
しました。課せられたレポートの内容は、「マルクスの『経済学・哲学草稿』（岩波文
庫）中の「疎外された労働」の箇所を読み、レポートせよ。」というものでした。教
養課程ということで200人近い学生が履修している訳ですから、学生生協書店の『経
済学・哲学草稿』はあつという間に売り切れてしまい、のろのろしていた私は、仕方
なく国民文庫の『経済学・哲学手稿』を購入せざるを得ませんでした。しかし、実際
のところこの超難解な文章は、全く理解不可能でした。しかし、「ホトケの奥山」教
授は、惜しげもなく全員に「優」をくれました。レポート提出後に、遅ればせながら
岩波文庫版も入手しました。そして「優」をもらっただけに後ろめたさが募り、「疎
外された労働」は私の課題となるとともに、奥村先生は忘れられぬ人となりました。

商品・貨幣の物神性 後に「疎外された労働」を理解するには『資本論』の理解が欠
かせないことを知ります。それは向坂先生の「人間疎外と『窮乏化法則』（『資本論
と現代』法政大学出版局刊 所収）という論文に出会ってからです。

1983年3月16日の朝日新聞は次のように奥山先生の訃報を報じました。

「奥山次良氏（おくやま・じろう）北大文学部教授）十四日午後四時三十六分、脳
しゅようのため、札幌市中央区の札幌医大付属病院で死去、五十四歳。葬儀・告別式
は、北大文学部葬として十七日午前十時から、同区北一西一三の日本キリスト教会札
幌北一条教会で。自宅は同市北区北七西一、バームハイツ二〇一。社会思想史専攻。
訳書にユルゲン・ハーバーマス『認識と関心』（未来社）、著書に『転換の思想』（学
文社）四月刊行予定）がある。」

正に、奥山先生はマルクス没後百年のその日、3月14日に亡くなられました。私
にマルクスの「疎外された労働」という生涯の課題をプレゼントしてくれたのは、奥
山先生です。先生の死も背中を押してくれ、この年、1983年5月から和氣誠先生
との資本論研究会が始まりました。今なら、自分なりの理解の状態ではありますが、
奥山先生と「疎外された労働」について、向き合っ議論できそうな気がします。少
しく本当の「優」に近い付いているつもりなのですが……

向坂先生は次のように述べられます。「疎外という概念は、本来ヘーゲルからマル

クスに伝わっている。したがって、マルクスの初期の著作には、疎外、自己疎外、物化等の言葉が用いられるが、『資本論』に到達したマルクスは、この言葉を、若い時ほどには使わない。『資本論』の分析そのものが、人間疎外の具体的な分析であるからである。」と。

そこで、「疎外された労働」「疎外・自己疎外・外化・物化」といった奥山先生からいただいた課題について、その理解の筋道、すなわち「商品・貨幣の物神性」「資本主義的蓄積の一般的法則」についての、向坂先生の論文の一覧を紹介させていただこうと思います。勿論、自分自身の理解のために整理作成したものです。

〈資本主義的蓄積の一般的法則〉、いわゆる「窮乏化論」についての研究文献

―向坂逸郎の「窮乏化論」に関する文献 ※初出、及びその後所収の出版物―

(1) 『物神性』の発見

〔『経済学方法論』第1分冊第1章 河出書房、1949年8月刊〕 初出

* 『経済学方法論』(社会主義協会出版局、合本 1979年刊) 所収

☆(2)とは異なる論文です。

(2) 「物神性」の発見〔思想〕第5号 岩波書店、1947年8月1日発行)

* 『マルクス経済学の基本問題』(岩波書店、1961年刊) 所収

* 『永遠に生きる思想』

(マルクス没後110年記念出版刊行委員会、1993年刊) 所収

(3) 資本主義における失業の不可避性

(九州大学経済学部『30周年記念経済学論文集』所収、1955年5月1日刊) 初出

* 『マルクスと現代』科学的社会主義の根本問題』(大和書房、1979年刊) 所収

* 『資本主義における失業の不可避性』(社会主義協会出版局、1987年刊) 所収

(4) 資本主義の論理と人間

〔『現代思想』第4巻 岩波書店、1957年1月1日25日刊〕 初出

〈改題〉 Ⅱ 資本主義的蓄積の一般的法則〜いわゆる窮乏化について

(『マルクス経済学の基本問題』岩波書店、1962年刊) 所収

* 『資本主義における失業の不可避性』(社会主義協会出版局、1987年刊) 所収

* 『永遠に生きる思想』

(マルクス没後110年記念出版刊行委員会、1993年刊) 所収

(5) 「窮乏化論」について (社会主義協会、『社会主義』1957年5月号) 初出

* 『私の社会主義』(至誠堂、1961年4版Ⅱ新版) 所収

* 『マルクス経済学と私』(社会主義協会出版局、1983年刊) 所収

(6) 「窮乏化論」について〔『三田新聞』慶応大学、1957年7月1日803号) 初出

* 『資本主義における失業の不可避性』(社会主義協会出版局、1987年刊) 所収

(7) 「窮乏化理論」の概説

(新潮社、『マルクスの批判と反批判』1958年3月20日刊) 初出

* 『未来は青年のもの』(日本社会主義青年同盟、1983年刊) 所収

(8) 「疎外型革命家」の自己疎外〔『社会主義』社会主義協会、1964年4月号) 初出

* 『未来は青年のもの』(日本社会主義青年同盟、1983年刊) 所収

(9) 人間疎外と「窮乏化法則」

〔『唯物史観』第1号 河出書房新社、1965年10月5日刊〕 初出

* 『資本論と現代』(法政大学出版局、1970年刊) 所収

* 『資本主義における失業の不可避性』(社会主義協会出版局、1987年刊) 所収

(10) 人間の自己疎外について

『唯物史観』第8号 河出書房新社、1970年2月20日刊) 初出

* 『マルクス経済学と私』(社会主義協会出版局、1983年刊) 所収

(五) 信州松本の郷土史研究と多様な副産物

野上弥生子と諏訪根自子 堺利彦と向坂先生が厳しい評価を下す木下尚江ですが、尚江を中心に近現代の松本の郷土史とお付き合いして来たお陰で、副産物も多々あります。例えば、野上弥生子の絶筆となった自伝的小説『森』に登場する「毎日新聞の山下簾雨という著名な記者」、すなわち弥生子を明治女学院へ誘ったのは、木下尚江です。

また、戦前戦後を通じて世界に通用したヴァイオリニスト諏訪根自子ですが、彼女の両親の仲人をしたのは木下尚江です。

松本市は「学都、岳都、楽都」などと標榜しています。「楽都」と言われる所以の一つは、鈴木鎮一先生が創立し世界に広がった才能教育研究会・スズキメソッドの発祥地であるとともに本部があるからです。今もベストセラーの鈴木鎮一著『愛に生きる』才能は生まれつきではない』(講談社現代新書)には、その諏訪根自子が鈴木先生の教え子であることも記されています。

鈴木鎮一先生と労農派の学究達 「人は環境の子、どの子も育つ、育て方ひとつ」というのが、才能教育の理念です。鈴木鎮一著『奏法の哲学』(全音楽譜出版社)では、鈴木先生が1920年代ドイツ留学中に交流して影響を受け感化されたとして、大内兵衛、森戸辰雄、石浜知行三氏の名が挙げられています。これには興味津々です。私が鈴木先生本人から直接お聞きしているのですが、帰国時の船内で約三十日間に渡り毎日交流して影響を受けた人として、向坂逸郎先生を挙げておられます。向坂先生ご自身からも、そしてゆき夫人からも、帰国時の船内での鈴木先生との交流については伺っております。帰国時の天白丸の乗船名簿の同じページに、お二人の名前は掲載されているのです。

帰国後、石浜知行九大教授は『マルクス伝』を、向坂先生は『レーニン伝』をそれぞれ改造社から刊行されました。戦後に向坂先生は『マルクス伝』、大内先生は『マルクス・エンゲルス小伝』を執筆されると共に、岩波文庫には『共産党宣言』が大内・向坂両先生の共訳で、『空想より科学へ』は大内先生、『資本論』は向坂先生の訳で常に入手可能な文庫版として、版を切らすことなく今日に至っています。

フォイエルバッハに関するテーゼ三 大内・向坂両先生が座右の書とされた哲学書であるエンゲルスの『フォイエルバッハ論』には、マルクスの『フォイエルバッハにかんするテーゼ』が付録としてあります。「テーゼ三」を読むと、「人は環境の子、どの子も育つ、育て方ひとつ」という理念とが、かみ合う気がします。音楽文化行政に14年間かかわった私は、「テーゼ三」に記されている内容こそが、才能教育研究会、学校教育等様々な教育現場に携わる方々に対して、「マルクスが提起した課題、今に

生きる課題」そのもののように思えてなりません。読者の皆さんも考えて頂けたらと思います。「テーゼ三」の全文は次の通りです。

「人間は環境と教育の所産であり、したがって人間の変化は環境の相違と教育の変化との所産であるという唯物論的学説は、まさに人間が環境を変えるものであり、また教育者自身が教育されなければならないということを忘れている。したがってこの学説は、必然的に、社会を二つの部分に分け、そのうちの一つは社会よりも優越しているとするようになる(例えばロバート・オーエンのばあい)。

環境の変更と人間活動との合致は、ただ変革的实践としてのみ、把握されかつ合理的に理解される。」(岩波文庫版『フォイエルバッハ論』87P)

(六)「理解する」ということ　　～　歩みは遅くとも　　～

勉強の仕方を教えてくれた恩師達　　中学二年で転校した私は、転校先で二人の忘れられぬ先生との邂逅があり、大きな転機を得ました。

転校して、三週間目金曜日の第一時限は英語で、中野善夫という東京高等商船学校出身の先生でした。三週連続、ドリルテストで零点の私を厳しく諫めました。本気で怒り、拳骨もありました。船乗りであった先生は、「世界中を廻ったが、イギリスでも、アメリカでも、フィリピンやシンガポールでも、赤ん坊も乞食も英語を話すのを知っているか？」と皆の前で問いました。そして、「英語の出来る、出来ないは、勉強したか、しなかったかという問題だ。やれば誰でも出来るものだ。」と言うのです。その一時限すべてを使って、英語の「勉強の仕方」も丁寧に教えてくれました。そして何故に日本語より英語は難しくないかという話もされました。

戦時中の中野先生は、輸送船の乗組員として潜水艦に撃沈されたり、潜水艦を避けるために嵐の中出港して座礁したりで、二回も命拾いをし、三隻目に乗船する為長崎での待機中に被爆するという体験もされています。また、『きけ わだつみの声』(岩波文庫)の中で二つの遺書が取り上げられている上原良司とは、旧制松本中学の同級生という間柄でした。こうした理由からか、日々生きることに對して、また、物事に取り組む姿勢なり態度について、大変厳しい方でした。

もう一人は社会科の宇留賀哲也先生です。理解するということが、どういうことかという事を教えてくれ、私にそのような仕方で毎日努力する事の大切さを教えてくれました。

「理解とは、君は中学生だから、今日学校で勉強したことを、小学生の弟や妹から、
「兄ちゃん、解ったよ！」と言われるように説明できたら、それが君の理解だ。教科書に在るそのテーマを見たら、その内容を説明できるようになる事だ。毎日、それをくり返すことだ。」と言うのです。

偉大なる天才マルクスの志　『資本論』の名を知って約50年、購入して約40年、それなりに読み始めてから約35年。勉強するほどに遠退いて行くような、しかし飽きることのない、魅力に満ちた『資本論』です。最高峰の「高い山」でしょう。そしてこれを「理解」するのは真実に大変な事だと思えます。

記念版の訳者前書きには「私は、『資本論』が、労働者、農民、学生、学者、知識階級一般の座右にそなえられることを希望しつづけてきた。そしてそれがマルクスという偉大な天才の志しでもあった。」とあります。『賃労働と資本』の前書き部分でのマルクスの「われわれは労働者にわかってもらいたいのだ。」(岩波文庫版40P)と一言一節を思い出す人も多いでしょう。

世の中、右も左も真ん中も、「経済の再生!」「経済発展!」を唱えています。しかしです、資本主義的生産様式の支配的な社会に於いて、「経済が発展する」とはどういうことなのか、これが問題です。

松本市も、過疎化による交通網の再整備の問題を課題にしたことがありました。東京一極集中と地方の過疎化、不安定雇用労働者や失業者の増大、格差の拡大、人口減少と少子化問題、待機児童問題、多量の食品廃棄物問題、そして原発再稼働、武器輸出問題、平和問題に対しては何でも有りの様相を呈している安本法制問題等々は、資本主義的生産様式、すなわち市場経済、あるいは商品生産社会において「鉄の必然性をもって作用」する経済法則のもとで織りなされている現象だと言う事なのです。

都留重人氏の幻想 経済学者都留重人氏の最後の著作のタイトルは『市場には心が無い』(岩波書店2006年2月刊)というものです。いわゆる「近代経済学者」の大御所であった都留氏の著作からは、「こんなはずではなかった!」という嘆きとか、慟哭が聞こえて来るように思います。

『市場には心が無い』の第一部「小泉政権の政策批判」では、郵政、道路公団の民営化の問題点を記し、「改革なくして成長なし」というスローガンの行き着くところを批判しています。

第二部「技術革新が進む社会的環境」では、高度情報化社会、少子・高齢化社会の課題に目を向けています。

第三部「明るい未来を求めて」では、アメリカからの独立、非核三原則の貫徹、労働の人間化、自然との共生等々を訴えています。

しかし、氏のこうした問題提起に対する正しい解決の仕方は、既に、19世紀にマルクス・エンゲルスによって提起され、証明されています。もちろん当時は原子力↓非核三原則などということとは、現実の問題ではなかったのですが。

「マルクス以来資本主義的生産方法と呼ばれているブルジョアジー特有の生産方法」(エンゲルス『空想より科学へ』岩波文庫版66P)、すなわち我々の生活している社会、すなわち市場経済社会⇨商品貨幣経済社会⇨資本主義社会と言われる、人間が作り出したシステムでは、「社会的生産の無政府性」(『空想より科学へ』岩波文庫版72P)が貫かれるゆえに「心が無い」のであって、ここで貫かれているものこそ「資本の論理」です。人間が作り出したものに関わらず、人間が制御できぬことを示しています。

「資本主義の時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身にとって、彼に所属する商品の形態をとること、したがって、彼の労働が、賃金労働の形態をとることである。他方において、この瞬間からはじめて、労働生産物の商品形態が一般化する。」

『資本論』岩波文庫第三分冊296P)と云う現代社会の、その労働現場での労働者の状態に対し、良心的学者達はヒューマニズムをして「労働の人間化」を云々するのでしよう。しかし、資本主義的生産方法をそのままにしておいて、「労働の人間化」を云々することは、地球が球形をしていて自転をしていることを認めずに、宇宙船を飛ばそうとするようなものです。

資本主義の経済法則と社会主義の必然性 こうした労働者・勤労国民の実態を招かざるを得ぬ「資本主義社会の経済法則」を闡明にした『資本論』は、その解決方法も歴史の必然として明示しています。

「一社会がその運動の自然法則を究知しえたとしても——そして近代社会の経済的運動法則を闡明することがこの著作の最後の究極の目的である——、この社会は、自然の発展段階を飛び越えることもできなければ、これを法令で取り除くこともできない。しかしながら、社会はその生みの苦しみを短くし、緩和することは出来る。」(岩波文庫第一分冊16P)という言葉には、マルクスの気持ちが込められています。

私たちは、「今の社会では、何故に全ての生産分野で、生き残りをかけた競争を強制させられているのか？」と自問すべきです。そして商品生産社会に生きる私たちは、次のことを知るべきです。「商品生産も、他のすべての生産形態と同様に、それに特異な固有のそれと切りはなすことのできぬ法則をもっている、そしてこの法則は、その無政府性のうちに、無政府性をおして自己を貫徹する。この法則はひきつづいて存続している社会的関連の唯一の形態である交換の内に出現して、個々の生産者に対しては、競争の強制法則となる。それゆえ、この法則は、初めは、生産者自身も気づかないが、長い経験により、彼らも次第にそれを発見しないわけにはいかない。要するに、この法則は、生産者から独立して、生産者の意志に反して、盲目的に作用するところの生産形態の自然法則として自己を貫徹するのである。生産物が生産者を支配する。」(『空想より科学へ』岩波文庫版72P)

この詳細なる答え、そして解決方法を、『資本論』は教えてくれます。『経済学批判』(1859年)で、「課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、またはすくなくともそれができはじめているばあいにかぎって発生するものだ」(岩波文庫版14P)と言ったマルクスは、『資本論』(1867年)では、「課題は、その解決の手段と同時に発生する。」(岩波文庫版第一分冊159P)と述べます。

マルクスは『資本論』の序文で「私がこの著作で探求しなければならぬものは、資本主義的生産様式」であり、「資本主義的生産の自然法則」であり、「鉄の必然性をもって作用し、そして貫徹するこれらの傾向」であると言います。そして「近代社会の経済運動法則を闡明することがこの著作の最後の究極的目的である」と述べます。

ご案内の様に、『資本論』第一巻第23章は「資本主義的蓄積の一般的法則」と題され、「本章では、資本の増加が労働者階級の運命におよぼす影響を取扱う。この研究におけるもつとも重要な要因は、資本組成と、それが蓄積過程の進行中に受ける諸変化である。」という一文をもって始まります。

資本主義社会の発展、経済発展とは、資本の集積と集中、そして資本の有機的組成

の高度化がより進行することです。こうした状況を、エンゲルスは「エルフルト綱領」を批判した一文で次のように述べています。

「プロレタリアの人数と困窮とはますます増大する。このことは、そう絶対的にいったならば、正しくない。労働者の組織、常に増大する彼らの抵抗は、おそらく困窮の増大をある程度阻止するだろう。しかし、確実に増大するのは、生活の不安定さである。私なら、これを挿入するだろう。」（『マル・エン選集』第9巻161P、国民文庫版『ゴード綱領批判・エルフルト綱領批判』98P）

新しく「雇用破壊」という言葉が生れて久しいのですが、就職してから退職までの約四十年、自分の身の回りで起きて来た事を振り返ると、「確実に増大」してきたのは正に「生活の不安定さ」です。そして、「今も確実に増大」していることは誰も否定できないでしょう。ここ数年の年金支給開始年齢の引き上げや支給額の削減を考えてみてください。非正規労働者の増大、いわゆる公務労働職場でも、今や三分の一以上が非正規労働者です。

（七）おわりに

労働者階級の知的発展 エンゲルスは次のように述べます。『宣言』にかかげられた諸命題の究極の勝利については、マルクスはひたすら労働者階級の知的発展に信頼し、その知的発展は、協同一致の行動と討論から必然的に生れると信じた。資本との闘いのなかで生ずるいろいろな出来事や変転によって、成功、そしてそれ以上に敗北によって、闘う人々はそれまでの万能薬がどんなに不十分であるかを知り、そしてその頭脳は、労働者解放の真の条件は何であるかについての根本的洞察をいっそう受けいれやすくなるにちがいない、とマルクスは考えた。（『宣言』1890年ドイツ語版への序文）と。ここで言う「労働者解放の真の条件は何であるか」を学び知るには、『資本論』の勉強は不可欠でしょう。「労働者の解放」と言いますが、そもそも何が「労働者の屈辱」なのか、これが本当は問題なのだと思います。

資本主義を乗り越える知性と理性とを 山川均は自伝の中で平民主時代を顧みて、次のように述べています。「ともかくも吾々の運動が、資本主義の勢力と太刀打ちして負けないほどの知識や能力を代表しているの نہかつたら、社会主義は資本主義にうち勝つことはできないのではないか——社会主義運動は資本主義を乗り越えようとする運動だから、それは当然に、資本主義社会の理性の水準よりも高い水準に立つ運動とならざるをえないのではないか——私は自分かつてに、社会主義の運動としてそういうものを心にえがいていた。』山川均 ある凡人の記録』（岩波書店版、274P）と。

「研究資料・マルクスの『資本論』（勁草書房刊『山川均全集』第一巻所収）として、日本で初めて、『資本論』の内容を原典に即して紹介した山川均だからこそ、このように「心にえがいた」のだと思います。

マルクスも、山川均も、日本のマルクス向坂逸郎先生も、「労働者、農民、学生、学者、知識階級一般」が、圧倒的に「資本主義の勢力と太刀打ちして負けないほど

の知識や能力」を身につけることが、そしてそれが「資本主義社会の理性の水準よりも高い水準に立つ運動」でなくてはならない考え、労働者教育に力を注いだのだと思います。

『思想のコペルニクス的転回』と『資本論』 エンゲルスは「十八世紀のフランスのばあいと同じく、十九世紀のドイツにおいても、哲学上の革命が政治的崩壊の序曲をなした。」(『フォイエールバツハ論』岩波文庫13P)と述べています。フランス大革命に代表される、市民革命での啓蒙思想の果たした役割を述べているわけです。そして、私たちに求められている「思想のコペルニクス的転回」の為の「哲学上の革命」は、唯物弁証法とその歴史への適用である史的唯物論であり、その「特殊な場合」としての「ブルジョア社会の弁証法」、すなわち、『資本論』の勉強です。

前出の山川均の「研究資料・マルクスの『資本論』」の最後は、次のように締めくくられていますので紹介させていただきます。山川の「読み方」を示しています。

「最後に『資本論』を読む者の注意は平民階級の心理によらざれば『資本論』は遂に理解し得べからざることこれなり。これ『資本論』が早く「平民階級の聖書」となるにかかわらず、紳士閥経済学者のために久しく解すべからざる迷語たる所以なり。なお『資本論』の前に一読すべきは『共産党宣言』等なりとす。」(勁草書房／山川均全集第一巻88P)

(二〇一六年九月十五日、中澤 秀行、おわり)

◇ 読者からのおたより ◇

言葉で言い尽くせない 創刊号から購読させて頂き感謝です。『社会通信』が送られてこなくなるのは寂し気があります。確かにホームページでこれからも情報を発信して頂けるとの事ですが『社会通信』が果たしてくれた意義は、私にとって言葉で言い尽くせないものがあります。前納金(預り金)、僅かですがカンパとさせて頂きます。本当にご苦労さまでした。(横浜・塚本鉄男)

今後も様々な企画で いつも楽しく拝見しています。残金の取り扱いでお知らせをいただき、すみませんでした。私の残金(些少)をカンパでお使いください。※ご連絡が遅くなりすみませんでした。今後も様々な企画で私たちの応援をよろしく願っています。(国労・坂口智彦)

運動の教材として利用 子どもがいずれか畑をしたいと言っており、つなぎで大粒で皮ごと食べられるシャインマスカットを栽培しています。社会通信は運動の教材として利用し、大変役立ちました。残金はわずかなカンパです。一度の生きさま、細ぼそと山梨の地で頑張ります。(山梨・雨宮一) 読み続けることのできるようになるが 永い間、闘いへの進路を学ばせていただき、また、国鉄闘争では大変お世話になりました。上京した際に何度か行動を伴にさせて戴いたことと合わせ、重ねてお礼申し上げます。インターネット等、手につけてなく、読み続けることができなくなることと思いましたが、今後のご活躍祈っています。残金は今後のご活動にご利用ください。(旭川市・安孫子博次) 二百号 今月号(二〇一六年七月)が二百号という節目の記念のニュースとなりました。私は二〇〇五年七月(第六八号)から編集に。私以外は全員替わってしまいました。当時のニュースを見ると、山手台保育園分会の兵庫県労働委員会への救済申し立て、播磨交通分会の結成大会等が。その後、分会結成もいろいろ行い、大きな成果を上げてきましたが、組織数は増加せず課題も山積み。次は三百号めざします。(あかし地区ユニオン)

寂しい 滝野さん、長い間たいへんお世話になりました。ついに社会通信とお別れの月になりました。非常に寂しさを感じています。労働運動、社会主義運動、高齢者活動と長い年間は、あつという間です。この間、社会通信でどれほど心を支えていただいたかわかりません。近代文明も私には、ケイタイ、ワープロにしがみつくのが精一杯。郵送十月分、残りカンパです。(名寄市・斎藤二郎) 学習会等で いつも学習会等でお世話になっています。少しですがカンパです。(神奈川・吉本淳)

暑氣払いでも 返済金についての連絡を受け取りました。少額ですがカンパさせて頂き下さい。みんな暑氣払いでもやりたいですね。

創刊以来 一九七七年の創刊以来の読者として、印刷物としての「社会通信」が終了（一区切り）するのさびしいかぎりですが、十一月からはホームページで活用していきます。長年ありがとうございます。残額は少額ですが、カンパです。

これから 長い間郵送ありがとうございました。これからもよろしく！

おつかれさま 長い間おつかれさまでした。紙のものが読めないのはさびしいのですが、これからがんばって下さい。残りはカンパに。

（神奈川・松永裕方）

国鉄闘争 創刊以来、これまで全国労働者に階級意識を啓もう、貴重な全国情報等発信し続けたこと、心から敬意と感謝です。とくに国鉄闘争に対し、公私ともにご指導いただいた嘉津子さん、体調いかがですか。お世話になりましたけど心配しています。残金はカンパです。（鎌倉・井上公一）寂しい 長きにわたり本当にお疲れさまでした。ケイタイ、スマホ文化はつる生活ですので、滝野節とのお別れはなんとも寂しいかぎりです。

（佐久市・菅原須摩子）

四二年、感謝です 「進路」「社会通信」にお世話になって四二年、「紙」がなくなるのは残念ですが、国労水戸地本の青年部長時代から多くを学ばせていただきました。感謝です。残金は少額ですがカンパです。

（茨城・大津桂一）

さらに発信を 本当にお疲れさまでした。これからもいつそう運動の前進のため発信くださいますよう、些少ですが残金はカンパさせて頂き下さい。

（水戸・横山卓）

私の記帳にもとづいて 七〇〇円の請求でしたが、私の記帳にもとづいて残金を送ります。もし違っていたらカンパということ。

（秋田・須藤伸）

時代？ たいへん長い間お世話になりました。少し寂しい気もしますが時代の流れでしょうね。十一月からはホームページで見せていただきます。

（熊本・池田章子）

長い間 進路からの読者です。たいへん長い間ありがとうございました。労働戦線の「統一」、国鉄分割民営化等々、思い起こせばきりがなほど貴誌には勇気づけられたことはありません。なんとか真つ当な労働者としての人生を歩ませていただけており感謝申し上げます。今後とも身体を大切になさって活動して下さい。残金は少額ですがカンパです。

（鳥取・幸山謙）

「通信・号外」 いま「通信・号外」（一九七九年二月と十月発行のもの）をパラパラやりました。内容はけっして古くなっていない。私は一昨年二月に倒れ療養中です。パソコン等はできませんので、いい機会なんじゃないか。カンパ送ります。

（町田市・S）

私も再出発 社会通信発行のため、全国各地に足をはこび活動報告、今日までの誌の発行に感謝いたします。市議会議員をリタイヤして一年四カ月がすぎました。今思えば3期十二年間、市民のための議員活動が出来ていたのか疑問の残る所です。今度は一市民としてがんばります。残金はカンパ、同封のものは活動に活用して下さい。

（名寄市・竹中憲之）

拍手喝采 協会規制で「進路」が廃刊された後、「突如」届いた「社会通信」！なるほど、こんな手があったのだと拍手喝采でした。以来、長い間ありがとうございました。残金に加えて些少ですが、「一区切り」に際してお礼のカンパを送らせていただきます。

（兵庫・西山寛良）

HPに期待 東京時代から今月迄お世話になりました。「進路」から「社会通信」、感慨深いものがあります。今後はHPでの活躍を期待しています。共にごんばりましょう。（北九州市・今坂健治）立ち上げ中 十一月からのホームページに参加。只今、パソコン立ち上げ中！！

（岡山・堀井進）

編集部だより 今回もたくさんの方から激励とカンパをいただき感謝です。今号で「紙」印刷を終わらせる予定でしたが、次号十一月一日号も印刷し郵送も行うことにいたしました。誌代は今回みなさまからいただきましたカンパを活用・充当させて頂いていただきます。

十一月十五日号からは印刷機も契約切れで返上してしまいますし、ホームページだけとなります。機会があれば、ホームページでも、無料で閲覧できますので、大いに宣伝し友人知人に拡げてください。この頃、パソコンは、役所や図書館、ホテルのロビーなどに備えているところが多くなりましたし、パソコンが得意な若者や、障害者宅に伺った時には、その機会をつくって欲しい心からの願です。

高齢者・障害者の安全で円滑な移動の円滑化「バリアフリー」の活動をすすめておられる方々で、手も足も動かない四肢麻痺者は口に棒をくわえてキーボードを叩き、全盲の方も巧みに指を動かすメールも送受信。文字は音声操作、それも二倍速三倍速で聴く。彼らの情報交換は、目から鱗です。

※このところ早め発送が続きましたが、十一月一日号は、十月二十七日頃 郵送・送信の予定です。